

ニーズを探し、応えようとして…… 神戸市長田区で保育改革が見えてきた

松尾純代

一、保育ボランティアに取り組んだ経過

自治労大阪府本部は、一九九三年四月に部落解放同盟・大阪府教職員組合・大阪同和保育研究協議会・子ども情報研究センターなど、大阪で人権保育・教育に取り組む組織とともに、アジア保育・教育交流推進実行委員会（略称・大阪マイペンライ）を結成し、その後タイ・カンボジアとの保育・教育関係者の相互交流・子育て相互支援の取り組みを進めている。活動を進めるについては、アジアでNGO自立支援活動の実績を積み、アジアの人びとから信頼されている曹洞宗国際ボランティア会（SVA）に多大な協力をいただいていた。

SVAは震災発生直後の一九日に被災地に入り、被害が最もひどかった神戸市長田区に注目、兵庫区に緊急対

策本部を設置して救援活動を展開し、関西に地盤のないSVAの活動家たちから、神戸の被災地の状況が刻々大



阪マイペンライ事務局に届けられていた。そして一月末、「子どもと親の精神的疲労・負担を少しでも和らげるため、簡易保育所を開設したいので、保母さんのボランティア派遣をお願いできないか」と大阪マイペンライに子ども支援協力要請がされた。

その頃、大阪府内の各市町村には、被災者の子どもたちの緊急入所があったり、被災者避難場所へ出張保育が実施されていたり、また大阪府による、被災地へ保母の派遣が可能かと調査が行なわれる状況であった。当然連合・自治労も被災地へ支援体制を組み活動しており、保育労働者部隊への要請もいつくるかもしれないという時期だった。がしかし、SVAから受けた被災地の実態は、要請されることを待っている状況ではなく、今すぐ支援活動を起こさなければならぬと感じさせるものだった。

一月二八日(土)、ともかく私は市職の仲間二人と被災地神戸を訪問することにした。二八日の朝八時、電車で阪神青木駅へ、そこからあるいて神戸市兵庫区にあるSVA阪神大震災緊急対策本部に向かった。阪神青木駅から一二キロ、ガレキや亀裂の入った歩道、へしゃげるようにつぶれたビル・家は、からだのしんどさより、心にとたえるものであった。

長田区役所では、やっと通れる通路以外、隙間がないぐらいに布団が敷かれ、布団をかぶってじっとしている人、一点を見つめて布団の上に座っている人びとが目に入

った。小学校の避難所では、炊き出しをしている横で何をしてもなくじっと見つめている子どもたちの姿が心に突き刺さった。ある公園では、乳児を含む多くの子どもがきびしいビニールシートのテント生活を送っていた。私たちに何ができるだろうかと考え、同時に多くの仲間がこの実情を知ってもらい、何か行動を起こしたいと考えた。

部落解放同盟を含めて大阪マイペンライ全体としては、被災地の子どもたちの状況報告から、緊急子ども支援として休日を活用して子どもたちとあそび活動をおこなう「保育ボランティア」を呼びかけることを決定した。

二、自費・自力の保育ボランティアを展開

私としても、保育部会に参加している幹事仲間にも、「二月五日(日曜日)に長田区の子どもたちに絵本や折り紙・紙・クレパスなどの遊び道具を届けませんか」と個人的呼びかけを行なった。どれほど集まるだろうかと思いつながら五日の朝八時阪神梅田駅で待っていると、各単組がそれぞれ仲間に呼びかけ、集まるは集まるは、五六人があそび道具が一杯詰まったリュック・大きなバッグをもつて大集合してきた。

いつもはおしやべりでうるさいぐらいのメンバーが電車の中からみる被災の厳しさ、青木駅からの道中、無残な家々やビルに言葉もなく歩き続けた。兵庫区のSVA

緊急対策本部についたのは午後一時、それからSVAがリストアップしてくれた長田区一八カ所の避難所を地図を頼りにグループ毎に訪問し、遊び道具を届けた。

「各避難所には緊急生活支援物資は充足し、積み上がった状態だが、子どもたちの絵本など遊び道具、気持ちを和らげるようなものは皆無に等しい」「子どもたちは各地に疎開しているのだろうか、少ない。だからこそ今いる子どもたちの姿がさみしそうで気になる」「子どもが親に纏わり付いているが、親がゆったりと対応してやる余裕がなさそうだ」「避難所本部に遊び道具を届けるだけで子どもたちはそれを使って遊んでくれるだろうか」「子どもたちは一緒に遊びたい」

このような声が仲間からだされ、被災地の生活・子どもや親の姿をかいま見たみんなは、遊び道具を届けるだけでなく、何かもつと自分たちにできることをしたい」という願いを強くもった。こんなみんなの思いを行動にしようと、府本部組織に働きかけた。

「動員でなく自主的参加で行なうこと」「土曜日・日曜日・祭日の自らの休日を使つての活動とする」「かかる費用についても、すべて自己負担とする」「ボランティア保険については自治労大阪府本部負担とする」「保育ボランティアの呼びかけは、以上の趣旨をふまえ、自治労大阪府本部の責任で行なう」との決定をいただいた。

自主的参加・自費で行なうことについては、自治労保

育部会として結成来初めてで、どういう意味を持つのか分からなかったが、被災地神戸の状況・人びとの避難所での生活実態を知つたものとして、動員で参加者を募ることはできなかった。今まで築いてきた生活すべてを失い、明日の生活の見通しももてないでいる人びと、その中で親・大人の不安・イライラは大きく、併せて長引く避難所生活でより拡大している。そして大人以上に不安をもち、ストレスをためている子どもたち、その子どもたちに出会う我々は、動員ではいきたくなかつたし、いつてほしくなかつた。いきたい・何とか力になりたいと思う保育労働者でこの取り組みを創造していきたくないと考えた。

三、長田区一ニカ所の避難所の子どもたち

「保育ボランティア」は、実施日の一二時まで、「大阪マイペンライ保育ボランティア本部」に昼食を済ませ集合し、そこで訪問する避難所の地図と避難所状況メモを受け取り、各避難所に出向き、一時頃から四時まで活動するもの。二月から三月までの間に徐々に交通網は改善され、兵庫区の本部に到着するまでに要する時間も短くなってきたが、始めは三時間かかるのがざらであった。その都度開通した交通経路を各参加者に連絡しながらも、それぞれボランティアメンバーは必死に本部にたどり着くという状況であった。

土・日・祭日の活動日の午前一一時頃になると、兵庫

区の「大阪マイペンライ保育ボランティア本部」に、遊び材料・道具を詰めたカバンをもって、電車・バスを乗り継ぎ、歩いてボランティアメンバーがたどり着く。テレビ画面でずっと見続けている被災地の状況ながら、悲惨な被災実態を見た衝撃、避難所の子どもたちは私たちを受け入れてくれるのかという不安にあふれた顔、ことばも少なげに本部に集まってくる。そして本部から各避難所の状況説明と、子どもたちの遊びのニーズの引き継ぎをうけて各避難所に出掛ける。

地図を片手にたずねた避難所で、「よくいらっしやいました」と出迎えてくれる人はいない。子どもたちが集まって待っているのでもない。厳しい生活で疲れが目立つ人びとや忙しく立ち働いている人びとの生活の場である避難所に入り、「保育ボランティアにきました」と訪れた趣旨を伝え、自分たちで子どもたちに「一緒に遊ぼうよ」と呼びかけることから始まる。しかし「遊ぼうよ」と呼びかけても、見知らぬ人の呼びかけに子どもたちは知らぬ顔、それにもめげず遊びの材料を取り出し、遊び始め、それが子どもたちの興味になうと子どもたちは集まってきた。一人またひとりと集まり、それがおもしろいとどこにいたのかと思うほど子どもたちは集まってくる。

保育ボランティアメンバーは、毎回子どもたちは何を喜んでくれるかと、いろいろな遊び道具をもって子ども

たちに挑戦し続けた。「こんな久しぶりやわ、学校みたいや」で紙工作に必死に取り組む子ども。「大繩したかったん」「こま、取り出されへんかったから、うれしいわ」と久しぶりの遊びに喜びの声、子ども同士の歓声が避難所に響く。それら子どもたちの笑顔や笑い声に、保育ボランティアは喜びを感じ、午後五時頃から活動をおえ本部に帰ってくる時は、自らの役割が果たせたと顔を輝かせ、会話が弾む。

不安と緊張感一杯の顔がこんなに変わるのかと思えるほど、避難所訪問前と後では顔が変わる。普段の私たちは保育所で待っているだけで、親が子どもたちを保育所に預けにきてくれる。子どもたちは「せんせい」が呼びかけると「こたえてくれる」「つきあってくれる」「それらのことに慣れてしまっている自分たちの姿に気づかされた。

保育所にくる子どもや親を待ち、保育所という枠の中できまった子どもに対応するのではなく、子どもや親の生活の場に出掛け、相手のニーズに伝えていく。そして不特定多数の子どもに、遊び内容で向かい合う緊張感もち、子どもたちが興味を示さなければ提供した遊びの内容を振り返り、子どもたちが楽しげに遊ぶと子どもの思いにかなったと、子どもたちの声を自らの喜びとする。これら日々子どもとの関係でもち続けたい緊張感と喜びの感触を思い出し、加えて、これからの子ども支援の政策に

こそ必要と思われるかわりの仕方、保育ボランティアで経験した。

そんな中で気づいたことがある。土・日曜日は各避難所にいろいろな団体によるイベントが目白押しに入る。

宣伝効果をねらったイベントもあり、各避難所にお菓子やおモチャをいっぱい配ることが多く、そのことによる子どもたちへの悪影響が三月半ばにでてきたことだ。

保育ボランティアが訪問すると「何くれるのん」「お金ちようだい」「お菓子もつてきてないのん」など、物をねだる姿が目立ってきた。また震災による生活の急変、長引く避難所生活は子どもたちのストレス、精神的負担をより一層増し、子ども同士のけんか、子ども同士のいじめも目についてきた。

保育ボランティアとしては、二月初めから二カ月に及ぶ継続した取り組みであり、各避難所の状況メモを引き継いだり、子どもたちとの遊びの引き継ぎもしてきたが、避難所を訪問するメンバーは異なり（継続してきてくれた人には同じ避難所を訪問してもらった）、気になる子どもたちの姿にもその場だけの対応しかできなかった。府本部保育部会・学童部会で延べ四〇〇名が保育ボランティアに参加し多くのことを学んだが、避難所の子どものことについてどうだったのか。

午後四時頃「もう遊びを終わろうか」と遊び道具を片付けだすと、もうこないと知っていたながら「またきてね」

と避難所の出口まで送ってくれる子どもの姿が痛いたしかったというメンバーの言葉が心に残る。子どもたちの姿の変化・要求の変化に、継続した人間で継続したかわりかもてない、今回の保育ボランティア活動の限界も痛感した。子どもたちが求めているのは、子どもたちの要求に応える、日々継続したかわりの充実である。

四、保育ボランティア活動を終えて思うこと

阪神大震災のすさまじさを、震源地のとなりで感じたものとして、また同じ子どもにかかわるものとして、被災地の子どもたちの実態を知って何もしないではいられなかった。だからこそ活動に取り組んだ。その一言に尽きるがその中で多くのことを学んだ。

一つは保育労働者の底力である。自分たちの休日を使って自費・自力のボランティアに保育・学童の労働者は燃え上がった。これほどの力をもっていることを自分たち自身も知らなかったと思えるほどの行動力であった。被災地の実態から何かをしたいという欲求をもち、自らの力を発揮できる保育ボランティアという活動であったからこそと思うが、「何かをしたい」と願い、実際休日・自費・自力の行動を起こした我ら自治労大阪府本部保育・学童労働者の主体的行動力に拍手を送りたい。

また一つは、主体的に判断し行動することのすばらしさである。震災直後、被災地の状況がテレビ・新聞等で

報道される度に、また事務職が行政支援で派遣されるのを見て「保母派遣」はできないのかと考えた。また自治労も大量動員をかけての支援活動を引いているのに、なぜ子どもたちへの支援活動の要請がないのだろう。何か取り組まなければと気をもんだが、手をこまねいているだけで動けない自分たちがあった。それは動員がないのに勝手にできないという、長年指示を受け行動することに慣れてきた習性だったと思える。

しかしSVAの要請を受け、被災地に入り、被災実態を知ったとき、活動したいという思いが強く身体の内から沸いてきて、指示をうけて行動するのではなく、自らの活動を自らが作る主体的な自分たちの姿があった。そして府本部としての活動と位置づけながらも、動員で人を集めるのではなく、自費・自力のボランティア活動とし、保育労働者に主体的行動参加を求めた。だからこそ四〇〇名もの労働者が集まり、自分たちが求め活動した中で得た、子どもたちの笑顔・笑い声の喜びは大きかった。自分が求めた活動だから、相手と一人の人間として向き合い、相手のニーズを受け止めての活動をし、喜びを共有できたと感じている。これからも、指示を待つて活動するのでなく、主体的に何をすべきか考え行動する保育労働者であり、それらを組織できる保育部会であることの重要性を一層感じた。

そしてこれら「保育ボランティア活動」を通じてずっ

と考えていたのが、保育改革運動との重なりである。保育部会として、ここ数年大阪府の子どもや親の生活実態に応える「子育て支援システム」を創造しようと保育改革運動に精一杯取り組んできた。その子育て支援システムについてのヒントを、被災地において「保育ボランティア活動」が教えてくれた。

その一つは、地域の子どものニーズを追求し、それに応える支援システムを創ることの重要性を痛感したことである。訪れた一二カ所の避難所は、それぞれ地域も運営方法も異なり、避難者層や子どもたちの年齢層、数も異なった。その中で当然保育ボランティアの私たちに求めるあそびなどのニーズも異なる。ボランティアメンバーは、各避難所を訪問し、子どもたちそれぞれのニーズを探し、うけとめ、応えようとかかわった。それはこれから創っていくかねばならない子育て支援システムの基本であると考ええる。

私たちは従来、親の要件に基づく「保育に欠ける子ども」を保育の対象とし、入所した子どもを保育所という枠にはめ、その中で対応してきた。しかし、大阪の子どもや親の生活実態から求められているのは、「子どもの権利条約」が述べているように、一人ひとりの子どもが自己実現を図るための子育ての保障であり、すべての子どもは、保育所という枠を超え、地域に、家庭に出向いて応

えていくことや、保育所が入所した子どものみの保育から、在宅の子どももふくめて地域の子育ち支援センターの役割を果たすことが求められている。そのことを保育ボランティア活動で実感した。

二つには、保育ボランティア活動を自ら求め活動し得た大きな喜びと自信を、保育改革運動を推進し「地域子ども計画」を策定する中で、感じていきたいと思ったことである。

我々は長年、入所措置基準に基づき、入所した子どもや家庭に対応し、親とともに子育てを精一杯行なってきた。がしかし、入所している子どもや家庭の姿が、社会・自然環境の変化により大きく変わり、従来のかかわりでは不十分であることを自覚し、ニーズに応える抜本的改革が求められていることも分かりながらも、やろうという意欲を持ち切れないでいた。また、保育所周辺の地域の中に、気にかかる家庭や子どもが増えてきたが、対応しようとする一步が踏み出せないでいた。それは我々自身、いろいろなことに受け身で、主体的に判断し、積極的に行動することができない保育行政システムに長年浸ってきた結果であるように思う。そしてその中で、自らの仕事である保育労働に自信と誇りを失ってきていたのではないか。

しかし今回の「保育ボランティア活動」は、それぞれ主体的に判断しての参加であり、避難所での活動も自ら

が考えて創ってきた。そして活動を終えた保育労働者には、自らの力を発揮し、子どもたちの笑顔や笑い声を得たと、自信に満ちていた。

保育改革は人権をキーワードにした、子どもや親の生活実態に応える「子育て行政システム」を、生活実態を把握している保育労働者自身の主体的行動力で創ることが重要であり、それがないと創造できないと考える。併せて、保育改革をしなければ、保育労働者の自信と誇りを再構築することもできないのではないかと考える。

これら「保育ボランティア活動」で得たことを大阪の保育改革運動に生かしていきたい。

最後に阪神大震災から半年がたったが、避難所にはいまだ一万数千人の人びとが生活している。我々の保育ボランティア活動は三月末を一定の区切とし、子どもたちの姿には心を残しながらも、四月来、日常業務と、保育部会としての「地域子育て支援計画」策定に向けて取り組みに追われている。その結果、その後被災地の子どもたちの実態は十分把握していないのが実情である。しかし今後、神戸の保育労働者と連絡を取り合い、支援の在り方を考えていかなばならないと思う。

一月三〇日、タイ・バンコクのプラティープ・ウンソムタムさんが、SVAバンコク事務所長である秦さんとともに、バンコクのスラムの子どもたちがカンパ箱をもつて、スラムの住民たちに募ってくれた、お見舞いカン

パを携えて来日された。

一九九三年からの大阪マイペンライ活動を通じて私は多くのことを学び、見えてきたように思う。中でも、バンコクのスラムや農村、山岳地の厳しい生活にもかかわらず、生き生きと今を生活している住民や子どもたちの姿、そして彼等のニーズに応える活動に誇りをもって取り組むNGOの活動家の姿に、自らの生活と保育労働者として

の日常活動を振り返った。大阪で自分たちがしていかなばならないことも見えてきた。そんな交流で積み上げてきたことが、タイからの心暖まる「お見舞いカンパ」に繋がったと思う。これからも国を壁を越えての交流を進めながら、大阪を、保育活動を、自らを追求していきたい。